●本誌は世界主義を標榜して婦人解放を主眼とす

世界婦人

「世界婦人」

「世界婦人」の本領とは曰く婦人解放即ち是れなり、婦人解放とは、曰く、天下の女子をして、男子と同等に、其の個性を、開發せしむるため、こゝに絶對的自由を、女子に與へんとするとこれなり、故に「世界婦人」は、現社會に向つて、女子の自由のために絶叫す、女子の自由とは、又人類の自由と云ふと一般のみ、是に於てか「世界婦人」の務めは、女子問題より引いて、「人道」の開導に在つて存す、負ふところ又重い哉

「兩性」

見來れば、世間の事一切は、亂麻の如く紛擾して、究むとすれど難し、物は單より繁に趨き、人は迂愚より、賢實に走る、而して漸やく多岐に分れ、其の本を失ふに至る、男女間の係りに於けるも亦然り、互に同じき「人」たる本分を忘却して、徒らに其の目前の力倆の相違、廢れたる舊き習慣に法り、其基を滅却す、素より其の道の各異なるは自然にして、其の個性の神聖なることは何人も決して之れを疑ふべからず、誰れか男女兩性の生命に等差を付し得るものあらんや、あらば其の者は不正なり、

「有爲所以」

男子のみの社會を見よ。㒵慣して悶ふるものは女子に非ずや、其論尤も甚きを知らず、男子は人生を解せず、女子を侮蔑して敢へて非道を行ひ、玩弄凌辱を事とし、止まず、女子は意氣なく、力なく、徒らに嬌めて、虚榮と空名とのために、甘んじて男子に隷屬し、以て婦道となす、故に定見もなく、何等の信念もあるなし、かくて世は靜穏なるべき乎、過去の長き年月、女子は全たく男子のために泣き苦んで、今は悶ゆるの力もなし、自己を全うするの覺悟だになくなりぬ、「世界婦人」は之れ等、すでに死せる骸を起し、女子のために自由を謳歌し光に導き、世の男女をして同じき情意の中に共に意義ある生涯を送らしめんと欲し、いさゝか爲すある所以なり、

「道」

行衛はだゞ一條道なり、人の自由のため、女の自由の爲、萬事を捨てゝ進行せんとするなり、恨みもなく、憤怒もなし、たゞ止むに止まれぬ務めのこゝに存するを見て、天下の婦女子を覺醒し、人道の正理を示し、斷斷し、説破し、叫號して、弱きものを、立たしめ、なやめる者を勵まし、悲めるを慰さめ、疲れたるものを勞はり、光りとなり力となり、希望となりて、眞理の殉人となり、敗者の友、罪人の隱れ家となりて、自己の信念を固守し摧れず、ためらはず、確的なる步武を進まんなり、

世界婦人の見地　　神田松子

角筈の一寓に世界婦人の生れたるは、去る一月のことなり。卓然凡俗の群をはなれ自由と革命とを標榜して、奴隷のごとく縛されし婦人の絶對解放を叫び、眞個こゝに女性發展の見地を的確ならしめんとして起りし、婦人運動の一機關なり。

春秋三千年の長き歷史の間、社會の暴壓羈絆に苦しみ、男子の暴戾凌辱に疲れ果てし吾人婦女子は、今や覺醒の今時に於て、また何をか逡巡せん。固陋なる道德習慣夫れ何んするもので。理性の指示せるところたゞ勇猛邁進せんのみ。暴惡なる社會と苦戰奮鬪せんのみ。冷かなる世の哲人高士が死せるが如き女道訓を以て如にかはき愛に渇せる吾等の愁恨を伸し去らんとするは、あまりに痴愚に過ぎざるなき乎。固陋なる激儀貞操を以て自ら安んぜし時代ははや過去の歷史なり吾等如何に無能なりと雖も、いさゝか理性の螢光あるもの、いかで世人の迷信忘想に欺かされて、自己の見地を失ふものならむや。

噫人と云はず、天若し靈あらば神あらば悽惻なる吾人が呻吟の聲をきけ孤枕に輾つて落城の夢寒く、こゝに革命狂猛の女人等があふるゝ幽憤を胸に抱いて愁恨多き社會と鬪はんとす、宗教も道德も吾人が幽憤を慰消するに足らずげにやヤソ會堂に於て熱心にアーメンを一唱するも、人權と自由なき吾人婦女子の地位は、依然として變らざるべし、いづれは結局社會主義の眞理に來つて、醜惡なる現制度を破壞し、眞個人間自然の性情に歸るにあらざれば、永久に吾等のは解決し能はざるなり。

於此乎、吾人は淺薄皮想なる所謂宗教道德を去り、確乎たる社會主義的見地に立つて、婦人の絶對解放を叫ばんとはするなり、吾人の理想は醜惡なる制度破壞によりて絶對解放救致にあり、不羈獨立自由にあり、清廉高潔にあり、溫情和平にあり、縛されて安んぜず、侮蔑せられて甘んぜず、頑弄せられて悦ばず、一個清廉完美なる人として將た女性として、吾人の生命を保持せんとするにあり。煤ふけたる澤庵三片に麥飯のめしも、自ら炊ぎ自ら食ふあらば足れり垢衣襤褸以て自ら牢所の別如たらんとも自由に働くあらば、何んの恥するところか是れあらむ。畢竟するに吾人の努力は自由獲得にあり。獨立自活にあり、吾人人權自由の保持せられざる以上は、決して/\男子のために從ふ勿れ。飢えて倒るゝも男子の暴戾に屈する勿れ。吾人學生の大衆は、凡ての汚れ果てたる虚僞虚飾を去つて、人間自然の性情に歸り、裸々たる自己を滿足するにあり。猥りに社會の俗趣に屬られて自己の見地をあやまる勿れ、さらば姉妹！我が敬愛する同志の友!!希くば蠢々たる馬鹿族の群を去つて、來つて朴直なる我が革命の友と語れ、溫情和平或は諸姉の胸をいやすものあらむ乎。

無題録　　溪水

▲吾人は誠實を愛し、虚僞を嫌惡す、善と親み、醜惡と頡頏す、然れども常に、虚僞を行ひ、醜惡を事とするは何ぞや、確然たる信念を有して正義に興し、高き理想に憧景して、浮世を冷笑すと雖、尙吾人の行爲に表裏あるは何ぞや、自らを美且善となせばなり、理に落て自ら知らず、自ら欺けばなり、現世否を否とせざる者多きを恨む。

▲大なる愛は一見、酷薄なり、殘忍なり、されど其結果は讃むべく、尊ぶべきなり、大なる愛は常に誤解せられ、擯斥せらると云へども、其の光輝は決して滅せず、決して滅せず、益々廣大となり、愈々潤明となる、而かも我れ等の愛は、常に四圍の狀況によりて、變移遷轉す、情實の愛にして、愛其の者に非らず、私慾を含み、名聞を混入す、其の結果は、即ち修復すべからざる破滅なり、吾人の理想は人和の全般が愛によりて　つならんこと之れなり。

うろこ雲　　橋水狂風

胸の火にみ口を出づる菜油に似たる言葉のそゝがるゝなれ

美しきいつはり人よゆく秋の風におくられ逝によとおもふ

身ふるひす十のお指もおん胸も氷のごとく冷えたまひけり

わかつきの空のあなたゆ海かけてうろこ雲しぬ下總の浦

世の櫂に賜びもたまへとわが胸のさびしさ吸ひに來し秋の蝶

肉かなしもの、何にかいと強き渇きにあへぐあさましさを見

われは死ぬ君が涙にわれは生く君がおん血につちかはれつゝ

ひらさきのおん丈長の放ち髪なびけおはしぬ初秋の風

このあゆみ一歩も君にかゝりそめに運ばじといふ人をおそれぬ

拜ひ姫はふりぬ袂の三尺を大き孔雀のさふさ如くに

死にしやあまりに蒼きさびしさの實を蝕みたれば胸もひやゝに

君はゆくとほき北なる死の島のしろき扇さふ冷たき宮に

くちびるに紅の炎のもゆる時こゝろの驕る力をおぼえ

大洪浪屋に何の花か黄に咲きし音家ながるゝ大利根小利根

心いまさびしき灰の冷たさを知りしはじめの日のごとも泣く

顔の灰をまちえし水色に凝りも沈めるおんしめやかさ

人三五うはさし合ひぬ秋の朝小火事の跡のけぶりの中に

（完）

●女子大に讀むべく男子盛んに讀まざる可からず

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

海外時事

婦人選擧權問題と萬國社會黨

第七回萬國社會黨大會は婦人選擧權問題に關して下の如き決議を通過したり

大會は最大の敬意を以て第一回萬國社會主義婦人會議に敬意を表し、婦人選擧權に關する同會議の決議せし要求に、全く一致せることを表明するものあり、且つ大會は特に下の如く宣言す

婦人普通選擧採用の爲に、最も强烈に運動するとは各國社會黨の任務なり、社會黨は婦人制限選擧を以て、女性の政治的平等の原則を設けたる鳥羽繪の如きものとして排斥す、故に社會黨は此原則を具體的に其實現せん爲に闘爭するものなり、即ち丁年女子普通選擧權是れあり、此原則に依れば選擧權は全ての丁年に達せし婦人に屬し、財產、納税、教育其他勞働階級の婦人を此權利の享有より除外するが如き、如何なる資格をも條件となす可らず、又社會黨の婦人は、此選擧權の完全なる平等を獲んとする闘爭を、中等階級の婦人と共になす可らず、政權を完全に民主的とする可き根本的にして、最も重大なる一改革として婦人選擧權を主張する社會黨と共にす可きなり

婦人普通選擧採用の爲に最も敢爲に運動するとは、各國社會黨の任務なり、茲を以て國民的なると地方的なるとを問はず、立法行政の政權を民主的たらしむ可き運動には、必ず婦人選擧をも包容せざる可らず、又之を議會其他に提出すると否とに係らず婦人選擧權を主張せざる可らず、男子の選擧權が既に充分に擴張せられ、若くは完全に實現せられたる諸國に於ては、社會黨は婦人普通選擧權の運動を起す可し、然して之と共に未だ實現せられざる、平民階級の男子の十全なる市民權の要求をも提起す可きと固よりなり

萬國社會黨大會は如何なる國に對しても、一定の時期を指定して選擧運動を開始す可き指揮を下すと能はざれども、既に斯の如き運動が一國に於て開始せらる可しとせば、之は一般社會民主々義の原則に從ひたる何等の區別なき成年普通選擧權の要求ある可き也

十六歲の婦人運動者

愛蘭土は由來美人の國とて、澄みたる眼の色と柔き黑き髮とは他國に類なしと呼ばれたるが、エリザベス・フリン孃も此血を承けたる、花の如き十六歲の少女なり、孃の父はプランタスの一平民として熱心なる社會主義者なりしかば、其赤き旗かげに育てられたるフリン孃の社會主義的思想は稍かに家庭のうちに養はれたり、孃が初て社會主義の演壇に立ちしは昨年の一月なりしが、今やニユヨルクに於ける活潑なる運動者にして雄辯家の一人として、諸方の集會に招聘されつゝあり、彼女は高等女學校の二年級を修業せしのみなれども、其智識と云ひ、言語身振と云ひ廿五歲の婦人とも見る可き程なりと、フリンの演説中には下の如き言葉あり

『國家は凡ての小兒を養育するの責任を取り、以て婦人が小兒養育中、男子の支持に依賴するの必要なき樣せざる可らず』

『愛と云ふ名前の下に行はるゝ賣買は最大の背理なり』

『各人に平等の機會を與ふる經濟組織を指して社會主義と謂ふ』

『世界中の賃銀勞働者の階級は、皆是れ社會の犧牲なり』

海內時事

厭世自殺

うつし世をば、情なしと觀じて、一人の男の子、悔憤疲れて自ら死しぬ、明治四十年十月二十二日の朝まだき、芝公園の櫟の常盤樹に自ら首つりし、あはれなる男の子は貳十余歲の數年月を、世と共にうつり、人と共に育ちて、漸やく分別もつき、智慧もまさりけるを、自ら死ねとて子を守りはぐくみし親、いづくにあらんや、自らくびらんとて眼を損ふばかり物まなびする者、いづくにありや、これより多くの人の間に交はりて、浮世の業にも係づらひ、安慰と逸樂とを求め、己のが慾望を滿たさんと思へる人の數ある中に、數限なき無情を觀じて自ら逝きし者こそ羨ましけれ、不眞面目なる人は愚とのゝしり、狂と嘲りて、心を寄せぬ樣なり、素よりなき人の不幸は、吾人之れを知らねども、其の人の辭世の思は、いと眞面目にして、悲しき運命の消息なり、美しき涙を垂れて、此の若人が、後に殘せし恨みの遺言を懇ろに、弔ひ給へ、我が兄弟姉妹の君たち

嗚呼憂愁は煩悶を生じ煩悶は終に悲む可き運命に陥らしむ然るに余は之を惜みし筆て書　なし余や今にして最早社會の罪惡に葬られ了りぬ未だ後益に二十有餘年今に何を爲す事なし又何の罪あつてか社會に生存するを得ん情弱なる社會組織を受んより寧ろ死を辭せざるなり人或は狂と言はんされど余は狂せしにあらず唯だ儘ならぬを憾むのみ（原文の儘）

まことに狂せしに非ず、確然たる信念の缺乏せるがため、情慾の止みがたき、悲痛に堪えず、目前の恐れをも見ず、身の打ちおのゝくをも覺えで、終に芝公園の闇に入りぬ、彼れは社會を怨み、己のが身の悲運に精査きて、死を決行せり、死せるなり

義務教育の延長

先頃より頻りと攻究せられて居た義務教育延長のこと、果してこれが明年度から實施せらるるか否かと、吾人すら懸念して居たが今日までの處では、全國中延長實施の申請をなしたる者、未だ一縣も之れなしと云ふ、素より其の内情には色々な故障のあるのが當然だ、教員の問題もあらう、校舍の設備もあらう、其他煩はしい多くの考案もせねばなるまい、教育委員の說が、兎角合はない所もあらう、然かしこの事は、是非近い中に實施せられでは叶はぬ事だ、吾人は兩手を擧げて賛する、否、之れなくてはならぬと主張する、而して現在の貧民階級にある者が如何に無氣力な、定見なき者なるかを見よ、彼等の内には、自分の苗字さへ書けぬ者がある、誰れも知つて居るとではあるが、それが一體何處に歸因したか、寸毫の教育だになき徒が、又どうしてこんなに多いのだらうか、何の期するところもなく、肉慾と、愚かなる閒話とを喜べる人間の、またどうしてこんなに多數なんだらう、吾人は彼等を見る度每に痛憫に堪へられぬ、若し貧と云ふ冷たい鬼のなかりせば、彼れ等はモツト深い有爲の人物であつたらう、今でも學齡兒童でありながら、行きたくも登校出來ない者が澤山ある、少さい娘などには一層多い樣だ、家事の手助けをしないならば、終日見守して、可無駄に遊んでしまふ、又夫れ〴〵役に立つ者は早くから金錢のために働いて居る、決して憐ちやないか、心は漸々に拗れて、よい事は覺えない、かくて見覺えのあやしき假名位知つて大人になる、無論事理には迂愚である、それに今、義務年限が二年增して六年となるのだが、之れに應ずるとの出來る父兄が多數にあるだらうか、實施は無論早速ならんことを欲するのであるが、或は恐る、之れに應ずる兒童の境遇が、マア免すだらうか、否か、今の處では疑問だ、

放火犯人

去月六日の事、東京本郷である、悲しき事實を耳に致した、ある男保險金が欲しくて自分の家に火を放ち、近所の家六軒までを燒き拂ひ、果ては、浮世にやつれた妻と飢に泣く小供とを余所にして檢事局へ送られてしまつた。此間まで砲兵工廠の職工であつたが腦が惡いので業を休み妻が賃わく手遊と煮豆とで辛くも浮世を渡つて居た家は根津で家賃に比し斷後五百圓ばかりの保險をして、自分ははかない不運の時機到來を待て居たのだらう。終に待ちきれずなつて自ら火を四隣に放つてと幾度かも、果さなかつた、今度は五度目であつたが自家へ火をつけて、その果は即ち六戸を類燒し却つて己のれは罪を得て獄に下つた

貧すれば亂する常人の習ひ、君子ならぬ彼は憐れなものである、素より其罪は云ひのがれん樣なし、されど吾人は彼を責めない、吾人には之を審判する權威もなければ、又關知すべき限りでもない、たゞ此の恐るべき事實の裏面には、一層に恐怖すべき、伏流の、無聲にして奔走せるあるを感ずる、當代の風潮が總て是の如き態をなして、潜んで居ると云ふのである、否流れて居ると云ふのである、人は皆利に走り、益に趨き而かも惡しき手段、罪深き謀を以て、自ら立たんとするものであるといふのである。正常なる手段は常に敗者の手中に在りて、所謂勝者は惡手段を用ひざれば己れの地位が危いのである、そして世は概々で、之が爲に罪を得る者があると思へば他の方面には成功者なりとブツて居る者もある、社會の缺陷より來る絕大なる力の傾きが、此等悲慘の源因をなして居る、我等は此魔力に打勝と同時に、又一方では貧と云ふもの惡といふものゝなき社會、苦痛や試煉のなき社會の經營に努ねばならぬ、彼の妻子は今、何して居るだらう、家はあるだらうか冬になるのに、痛ましい事である

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

羽織紐着の教訓

ひで

吾れ此頃、せちがらき、此世の生計にほとほと窮して、厭ひめするの餘裕さへなきを覺りぬ、されば、炊事やら、洗濯やら、日用の家事大小となく、其のうへ、身の職業をも日々に怠ると能はず、終日仔々汲々として逐はるゝばかり、殊に此頃は三兒の爲めに移り代りの衣服をもせ、焦せり廻はる其の忙がしさよ、果ては、淺果敢にも、婦人の身の果敢なき境涯よなど、人知れず、人生をかこつも屢々なん、忙はしきが中にも、絶へず冥想には我が心を奪はれぬ、一日、小供の羽織を仕立てばやと、針を手にして坐せし時、吾れ相應に淺薄單純なる思案の……而かも一種の創作が出でけるぞ可笑しき

女子敎育、男女交際等につきては、此頃世の人の多く頭を惱ます所と聞きけるが、吾れも此の事氣にかゝりて、アゝか、コウかと思ひに沈み、遂には夢の中に彷徨するの有樣なりしが、羽織の紐着けをつけんと針を手にせし時、我ながら、ヘフト驚くばかり、俄然一思案は定まりぬ

吾れ若かりし時、同じ屋敷內なる、草野某とて、維新前は祿百石を食みたりとか、中々富有の家なりしが、家祿奉還の後は、其主人も別に學問なけれど、擊劍の心得ありしを幸ひに、監獄の看守となり、其細君は裁縫の巧妙なる評判ありしゆへ、自宅にて裁縫の指南しつ、安らかに其日を送られけり。されど內實は決して、左樣に安らかなるに非ず、其細君たる姉ぎみは、いとゞ苦しき月日を送り給いき、吾れ其時十五六歲のことゞ、斯ゝる煩悶ある人に少しの同情も捧ぐるとを知らざりしは、今更面目なく堪へ難き心地すなり

當時其姉ぎみは年齒三十有餘の容貌醜からざる年増なりしが、仲々に氣品も高尙に、淸廉潔白の屋敷育ちにして、裁縫には殊に妙技を有し、髮結ふことも亦た甚だ巧みなりき、されば、其の收入も良人の君より多く、從て姉君の方家計の大半を負擔し玉ふ有樣なりしが、家長たる良人の君は、もと無敎育の人とて、女子を見ること奴隷の如く、己れの意に滿たざるとありとて、姉ぎみを打擲せしことも度々にて、姉ぎみは生ま疵の絶へ間なしといふ程なりければ、其煩悶苦痛を忍び玉ひし樣の今更にありありと思ひ浮ぶなり、然も此姉ぎみは女大學的思想を心中に深く印象せられし人なれば、斯ゝる虐待に遇ふも、皆己れの不束ゆへと忍耐して、時々吾れ等に其不快を洩らされ聊か慰めとはなし玉へり、其際の事なりき吾れは丁度羽織の裁縫を習ふて紐付けの處に至り、其の付けかたを尋ねしに、姉ぎみは嘆息して、斯く云ひ玉へり、あなたは此頃男女同權とやらの說を主張して、何處の集會にも能く氣焔を吐かるゝとか、併し何日頃よりの習はしか、此裁縫にすらも、男女の同權ならぬ事を敎へあるなり、そは御身の今學ぶ處の紐付けにて男子の合せ目を上方に向け女子のを下方に向けよと敎へあるなり、即ち男子は天なり女は地なりとの偶意なりとぞ、さても女は永劫男の奴隷として驅使せられねばならぬ者かな、嗚呼我は生き甲斐なしと申されぬ。宜なるかな、吾れ若年にして殆んど男子を仇敵の如く視たりしとよ、是れ姉ぎみの苦境に知らず〳〵感化せられたる敵愾心の熾なりしが爲めなりき。姉ぎみ更に曰く是れ何んたる罪深き虐待ぞや、來世は必らず男子に生れて……と共歎き玉ふと頻りなりき

吾れは此紐付けの着けかたを男女異にせし創作者の眞意を知らず、又た現在の裁縫諸學校に於ては、敎ゆる人も、習ふ人も、斯くまでには思ひ到り玉はざらん、天性魯鈍なる吾れは、年四十を越へたる今日に及びて始めて此の紐つけの意味を解釋し、男女問題の眞理は只だ此の一點にありと思ひ出でられし時は、我ながら不可思議の感興に打たれ侍りし

吾は斯く覺り侍りし、全體女子の天職は、主として愛情を以て働らくの方面にあるべく、男子の天職は、主として正義を以て働らくの方面にあるべし、水の卑きに就きて微細なる隙き間をも濕ほさんとするは、愛情に譬ふべく、火の高く揚りて如何なる障礙をも燒かんとするは、正義に譬ふべし、されば女子の紐つけの合せ目を下方に向け男子のが上方に向ふといふは、如何にも能く此兩性の天職を示すものには非るか

男子の外に出で、山野に戰鬪し玉ふに比して、女子が內に座して家庭に子女の哺育に身を委ぬるは、天然に動かすべからざる使命とぞ思はるゝ

思へば吾が過去の過ち多かりし事よ吾は男子と同じく、大に外に活動して男子に拮抗し智力にも經濟にも敢て遜色なくば是れ即ち同等の資格を擧げ得たるものとして、男子と同じく適宜に其政權とても、左右すべき權利ありと誤信せし事の耻かしさ近頃は婦人が獨立の職業に就くを仰々しく讃めたつる樣なれど、もと〳〵女子の權力を進長するには男子と同一の事業に働かさるべからずと思へるが誤りにて、同一の事業と同一の權利とが原因結果の關係ある如く思へるが誤りなり、彼の姉ぎみも惜しむべし、其紐着けの意味を誤解し玉ひて、女子は總て男子の永劫奴隷たらざるべからずと云ひ玉ふ、吾は左は思はず、由來男女は天性を異にす、從つて使命を異にす、されど人としては因と平等ならざるべからず、いかで、男子の奴隸たるべきや、紐着の着けかたも實に此意味の敎訓ならんとぞ覺ゆ更に熟々考ふるに古來男子の一般が女子を待遇するの無意味に玩弄的にして、女子を人格視せざりし此反動は終に新時代の女子をして蹶起法律の改正までも絶叫するに至らしめしなれ、吾とても斯く婦人の使命を自覺せり、なんすれぞ過去の過ちを再びするの愚を學ばん

されど迷蒙の雲の如き、女子が今日の社會現象に不快を感じ、逐々其軌道を脫して社會に活働すれば是れをも天然的に存する階級的差異と誤信して甚だしく是を嫌惡し罵詈するの弊あるのみならず、無情にも其高潔なる思想をも沒却して、不幸の淵に沈淪せしめんとす、特に法律までが男女の差等を作るに至れるは如何にも常理なき惡法にて、女子は實に偏頗の惡法に束縛されつゝあるなり、今一、二の例を擧れば、男子には公然密通罪を許可しながら、女子には重罪を科し亦治安警察法の如き女子を未成年者と見做し公衆を會同する政談集會に參列するを得ずてふ沒常理の法律を制定して、殆んど婦人を不具の同樣に取扱ひ、婦人が社會國家の一員たるを認めざる不法の制度を改めずして、只々婦人は家庭に籠居すれば其天職使命を全ふするものと牽強附會して、益々侮辱を加へんとす、勿論婦人の天性內に坐して家庭に子女の哺育に身を委ぬるも、そは人各々の趣味に因りて其職を殊にするとにて、或は不幸にして一生人に死別或は生別の變に際せざるべからざるあり、然るに斯の如き婦人にも尙天則なりとして是に家庭を強ゆるの權威を何人が持ち得るものならん、斯々る女子にこそ、德操ある男子は須く滿身の同情を以て、其婦人の才能を發揮せしめ是を慰撫して適宜に誘導の途を盡すこそ、當然の道なるべけれ、然るに如此犧牲的婦人をば直ちに人道の破壞者なり紊亂者なりと嘲笑罵詈を加へて恰も喪家の犬の如き慘狀を呈せしめ、女子をして、活動の途を與へず、不幸に沈淪せしめて、何處までも、奴隸的に發達せしめんとする、現今の狀態には如何にも默過する能はず爰に吾等は先づ同性間に向つて警鐘を鳴さざるべからざるを自覺し、斯くは嗚呼我閑數も、家庭を余所に拙誌の發刊に身を委せし所以なるぞかし、されど不知蒙昧の我れ少しも同性間を益するなく却て嘲笑罵辱の焦點となりて終るの感あり是れ即ち吾が無智淺學の致す處と、一つは吾が使命を誤解せしには然る乎との疑問は不圖此紐付けより起つて、斯くは老いの繰り言の如く、平々凡々の說をなすとの、阿呆らしさよ、讀者諸君も、さぞ愚かなものよと下げしみ玉ふなるべし

●謹んで御わび

本月一日發行の十九號は私事去る廿五日歸京致し不在中の雜務堆積に氣も遠くなる樣覺へ候て暫しは何事も手に就き不申、爲めに兩三日相遲れ候折柄、不幸にも印刷所主祖父の逝去に際して一頓挫を來し爲めに一回分を休刊致す事に相成、即ち廿號發行の十五日に十九號を配布致す事に相成候次第につき何卒右の事情御洞察の上御解恕被下度舊の如く御愛讀の程伏して願上候、何れ明年一月一日の滿一週年なる祝日を期して何か御愛讀の御高志に酬ひ度き考に御座候へば今日までの不行屆きの段平に御容赦被下度候

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

讀書の嗜好

赤司繁太郎

日本人程讀書嫌ひの國民はないと或外國人が許したが誠に適評で有やふに思はれる。予が知れる範圍内に於て外國人中圖書室を有せざるものは一人もない、然るにこの人こそ讀書家かと思はれる人でも日本人の知人中には其圖書室は實に僅なるのである。商買なり會社なり一日働いて歸り來れは最早一日の仕事はこれで終んだと云ふやうな風で晩酌に醉うて之れなり寢むものが先づ十中の九以上であるのに、外國人は殆んど總てが讀書の時間を定めて居る、旅行に出るにもカバンの中には必ず一二の書籍が入つて居る、滊車滊船中の日本人旅客をみれば實に愛相が盡きる、懶惰不規律等の展覽會の觀がある、偶然讀んで居る人があるので感心と思ひながら手にするものを覗けば新聞ならずんば文藝倶樂部か新小說の類である、欠伸する烟草喫む臥るこれが滊車中の仕事である、眞面目な書籍など手にする人があるのを見れは「なんだ生意氣な」と瞥觀するやうな風がある、實にわれながら日本人の讀書嫌ひなのには呆れざるを得ない。

屢々人の言ふことをきくに「讀書の時間がない」と、これは眞實であらうか、若し普通健康の人ならば而して眞實讀書を希ふものならば必ずや一日中一章を讀む位の暇を見出すことの出來ないものはなかろう。一日に一章、三十日にはかれこれ一冊の書籍は結了でしまうことが出來るのではないか、一年には十冊乃至十二冊、これを一年五年十年二十年と積つたならば一通の學問には通ずることが出來やう、或人が申したのに一日一時間づゝ學べは二年未滿て一語學に精通することが出來ると、然るに世人は果してこの一日に一章を讀むの暇を見出すことが出來ないと云ふのであろうか、世には新聞を讀んで肝要な仕事を怠て居る人が少なくない、予が知れる或人は役所から歸つて來て殆んど其晩を新聞に費やして居る彼は廣告も洩さず讀んでをる、時間を見出そうと勉むれば必ず見出すことが出來る予が知れる或婦人は赤兒に乳を含ませ、襁褓しながら英語を勉強して今では英文學を味ふことが出來るやうになつてをる、讀書の時間なしなどと云ふのは實に其人の惰怠を暴露する恥づべき言葉であるまいか。

何のために書を讀むか、少しく予が思ふ所を述べてみやう。

娯樂慰籍の方面から先づ一二の理由を說いてみやう。人若し書を讀み、讀書の嗜味を解するやうになれば常に善き朋友に接することが出來る、其居る所は室内であらうが郊外であろうが、船の中でも、鑛穴の中でも何處に在つても其仕事服着のみ着のまゝで世界中の最も高尚な趣味深き人々と最も親しき胸襟を開いて交はることが出來る、彼等は何時でも其胸奧の秘密を開いて彼を歡迎するであろう、書籍位平民的なとのはなかろう王候貴人賢哲を一堂に集めて平等的に相接することが出來る。

實に之に止まらない、吾人は彼等著者が其時代に解せられざるものを其書によつて知ることが出來る。シエクスピヤにせよ、ミルトンにせよ、ダンテにせよ、バイロンにせよ殆んと總ての大文豪は其生時の世界から眞價を認められなかつた、偏見あり嫌惡あり誤解あり其他種々なる事情があつて其人の實質を傷づくることが出來ないのは實に一の悲しむべき事であるかこれが過去の歴史の上に顯はれたる實際である。而かも吾人は其書を通して彼等の本質を知ることが出來る、即ち其當時の人々が知ることの出來ざる人をよく解し知ることが出來る。

吾人は書籍の媒介によつて過去の人世生活を窺い知ることを得る、即ち歴史を知ることが出來る、こゝは娯樂慰籍の方面から云ふのだから先づ歴史とこつても過去の最も優雅なる思想、麗はしき感情、高尚なる理想などや、情緒の極致を言明する詩などを讀むことが出來る。書籍の方便によつて天を究め星辰を學ぶことも出來れば、自由自在に世界の各所に旅行することも出來るいや旅費なくして多くの旅行者が見聞するよりも尚は一層精しく尚ほ一層密に見聞に富み得る、嘗てエルサリム巡禮を終つてきた旅行者がハムボルトの許に訪ねてきたこの大科學者の旅行者と極平易にエルサレムの地勢の精細なることから其近傍の風景さてはヨルダン河に至る道路に横はる總ての古跡を說明しつゝ相槌を打ちつゝ談すので旅行者は驚いて『何時あなたはエルサレムに御出になりましたか』と尋た、するとフヘムボルトの答は造作もない『いや參りしことはない然し一度行きたいと思つて其準備に少々研べたてとがある』と彼は實地に踏査せる旅行者よりも一層エルザレムに精通してゐたのである。實に吾人は書籍にて熱帶地方の風光を賞し寒帶地方に馴鹿を驅り溫帶地方に自然の美をさぐることが出來る。奇觀も絶景も山も川も湖も市街も建築も美術も何もかも一室の中でみることが出來るのは讀書の與ふる賜物である。或時は科學者と共に其實驗室に入つて研究することも出來る。或時に藝術家に伴なふて大伽藍の壁畫を描くのをみることも出來る。實に讀書の嗜好を養ひ得る人には娯樂と慰籍の泉源は滾々として盡きる時がない。（未完）

僕の幼時

岡野生

僕の母は、一家團欒の昔語りには、何時も僕が幼時の性行を語り出しては、僕を困らすのが常である。僕自らも廿余年の昔に歸りて、朧氣なる幼時の記憶を辿れば、當時の光景、茫漠と浮んで來る。

欅、榎生茂げれる小山が、麓の道端からスックと生いて道を蔽ふばかりに衝立つて居る、その道と高さ三尺ばかりの荒芝堤で堺した、見すぼらしい茅屋がある、小山はこの茅屋の後を遶捲きに圍んで西へ廻つて築屋の畑を裹んで小松林となり、東側の櫓柵の小山と競走をして、ズンと南へ出て水田の中へ陥つて居る、前は一面に開けて前今波打稲田となつたのも見た、この茅屋でその僕が此乱世で初て産聲高く泣た處なのだ

此の附近の中には同じやうな百姓屋が五六軒、此方の隅、彼方の隅に散在して居る後の山には樫、椎などが一段高く生茂なつて、秋になると、何石の實を饒落す老銀杏が一本、此村を見護つて居るかのやうに丁くと聳えて居る、冬になつてその木に梟が鳴いたのも覺えて居る。その根つ子のところに鐘楼が見える。此所は近村近在に名高い[illegible]なのだ。

此の五六軒の百姓屋の中には、僕が當年のお友達の、新太や、三や、太郎の家があるのだ。毎日午後になれば五十ばかりの飴賣爺が、鉦の拍子面白く、擂りながら時を違はずやつて來る。これはアンポウ飴といふ飴屋、この村から三里ばかり隔つてる在所といふところから來るので、村々の子供がこう呼びだしたのだといふことは後で母から聞いた。

新太や、三や、太郎と面白く、仲好く遊んで居る四歳ばかりの僕は、この飴屋の鐘を聞けば、例の狼狽さ、持つてるものも何もかも投げ出して、泣き出すのである。

「飴買つておくれよ……飴買つておくれよ……」、隣のお母さんは何事が起つたのかと五六町の彼方から、露かけた仕事の手を止めて、驅け附けて來る。

「そんなに泣かなくても買つてやるに、何故そんなに泣くのか？」と母に詰らるれば。

「行つてしまふ、早くせぬと行つてしまふ……」と地團太踏む、既に買つて貰つても中々泣止む氣色なく、猶一しきり悶えつゝ泣き叫ぶ。

「新太にも買つてやれよ……三にも、太郎にもウハヽヽ……。」

「お前だけ買へば、宜いではないか？……。」

「おれが食ふのを見ると皆も食ひたいからう ワヽ……。」

と泣きやまない、かくて母がお友達にも買ひ與へたのを見て、始めて野分の朝のやうに晴々と嬉々として、再びこの三人のお友達と遊び戯るゝのである。されば僕は飴屋が來る毎に持て餘したとて、此時の泣眞似、態度までして、泣虫であつたと笑ふのである。

僕は年少より此間までは可笑しく、馬鹿らしくて、たまらなかつたが、此頃その狀して恥つべきでも、笑ふべきでも無いことゝ思つた。それは、これが自然で、人間の本性で、唯り僕ばかりでは無く、誰れでもこの性情を持つて居るのであるが、種々の障碍のために、妨げられて、遂に凋落してしまふのだ、けれども幼かりし僕の一點半點の虚飾なく、赤裸々に發露したものに過ないと、こう思ふたからである。

僕が五歳の暮れ父母と共に懐しかつた新太や、三や、太郎に別れ、なつかしい後の山や高い銀杏の樹に背いて母の里である今の故郷に移つてしまつた。

昨年[illegible]三年僕が自然の性情は生活の苦に[illegible]の邀待に艱められて、いがみくねつて、また幼時の面影も見ることが出來ぬ。

山の樹木は伐採せられたといふ僕の古巣は跡形も無い、唯り藥師の銀杏のみは迷信に培はれて、いやが上にも生え茂けつて居るとのこと。新太や、三や、太郎は如何に生活して居ることだらう。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女性の使命

婧

（一）

乳房の甘きを含みて、夕映消れ行く空に、瞬く星の影見ては、あどけなく笑む稚兒を抱く若き「母」。夜寒に秋のなる儘に喞々として聲いと細り行く虫の夜を、孤燈の下、愛兒の書を讀む傍に寒さにと衣を綴る老いたる「母」……朧ろげながらも其處に婦人の眞價を窺ひ、『女性』の天職を偲ぶ。

悠久の光明に憬れて、現代に苦闘しつゝある人の世は、これ理想に懸れる一條の連鎖の如きか。人はその鎖の輪、彼は五十年を努力して輪一つを作り、更に理想に近き新らしき輪を子に作らしめ、更によく高き輪を孫に作らしむ、かくて限り無く、而して人類は進化し向上す。人の生涯は短かきもの也、然かも人はこの流れて去りて淀まざる中に留し止めし「我」なる印象を殘くは永久に消ゆる勿れと念ず……此處に戀愛は意義を生じ、理想を吹き込むべき教育は戀愛の使命に一點の睛を點ずる光の也。實に「戀愛」「育兒」「教育」は個性の要求にして又種の大意志なり、而してこれ女性の使命に非ずや、天職に非ずや。

（二）

「自由」の冠、「平等」の表彰、高くかざせる戀愛が、憎さげなる「現代」に捉へられて哀れに淺間しき樣を見よ。名と命と力とに娘を換ふる者、虚榮と誇負とに肉を鬻ぐ者、貧と苦とに情を賣る者、曰く掠奪婚、曰く賣買婚……『戀愛』てふ點に於て現代の女性は第一着にその使命を破壞しつゝあり、否、破棄せしめられつゝあるなり、煤煙低く迷ふ工場のあたり、南京米に痩せつゝある工女を見。樂酒篩づる宴舞の席、ヴァニチイに肥えつゝある貴婦人を見。夫を扶けて世路の難に、氣を腐らせつゝある世話女房を見て、「育兒」と「教育」てふ婦人の天職が現代の組織によつて、極度まで遺憾なく唾棄せられつゝあるを思ふ。これ、女性が使命の破壞にして女性の墮落なり、種の大意志の否定にして人類の退化なり。

（三）

心なく母の腕に夢むる頃より、一かどの人として世に働くまで、朝と云はず、夕と云はず、苦しき時、樂しき時、常に子に對して「母」は眞摯の教育者なり。子を知るは母に如くものなく、子を思ふは母に優るものなし、「教育」は當然、與へられたる母の使命なり

然かも見よ、この『教育』を温かき慈母の手より掠奪し去りて、冷かなる義務的の教育家なるものに委ねつゝある現代の大矛盾を！

その日〳〵の活計に一家の母を工場に送る社會は、その子を冷かなる教育の鞭に戰はしむるの社會なり。

虚榮を衒ふべく一家の母を社交場裡に送る社會は、その子を卑陋なる教育家の阿附と追從とに慣れしむるの社會なり。

母の懐より離れて、冷かなる教壇の前に蹲り、母の温情のそれならで、機械的の教育なるものをつめ込まれつゝある現代の小兒が、卑屈と虚僞とに天眞の英氣を窒服せしめつゝあるを思ひ、慄然とし轉々感慨に堪えざると同時に、飢えと寒さと、食と衣とをもて、母の手より玉の如き愛兒を離脱せしめ、「教育」てふ大使命を奪ひつゝある現代を呪はざるを得ず。

愛兒をして慈母の懐に復らしめよ、教育は神聖なる母の事業なれ。

（四）

戀愛よ、育兒よ、教育よ、女性の使命は一に懸りてこの上にあり。女性はこれを得て活き、これを失はゞ死す。

然かも、女性の使命の破壞は來るし戀愛は『現代』てふ鐵鎖に繋され、育兒と教育とは「現代」てふ鐵鎚に粉碎さる……女性を殺すものは、噫！現代なり。

現代に眠るべく、女性の使命を捨つべきか!!

女性の使命を救ふべく、現代と戰ふべきか!!

婦人諸君！　諸君は今やこの二者の中、何れかを選ばざる可からざるなり、而して女性としての諸君は果して何れを取らんと欲するか！

借問す、婦人諸君よ諸君は奴隸として桎梏の中に眠らんと欲するか。革命者として自由を思ふて苦しまんと欲するか……（完）

子もたず

（インデペンデント所載　ウマンスサーズン抄譯）

紅涙生

或る事情から私共夫婦は、親類の婦人と一緒に活らすことになりました、私共三人は五室に湯殿附の長家に住んでますが掃除は行届いてないんですけれど、明るくつて風通がよくつて、瓦斯もあれば暖爐もあり湯などもありまして、住んで見れば却々好い長家ですよ。私共はマンヘッタンの奇麗な心地のよい所に住むだけは稼げないから此處に移るのは私共相互に取つては非常に不便で御座いますの、此家の家賃は月二十圓ですが、彼處に行きますと同じ便利の所でも、此家より安いのがないと思ひます、誰も知つてる通りニューヨークの長家生活は殊更ら贅いですからね！

此家では月に六十圓要りますよ、前にも申しました通り三分の一は家賃で、食費は三人で日に一圓半位より多くしませんから大的三十圓、外に瓦斯代や氷代其他家計上の臨時費が月に十圓要ります、私共は良人のシヤツと妾の白襦袢を時々洗濯屋にやる外は、掃除から洗濯に至るまで家内の仕事は一切自身で致しますよ。お客様に御馳走するとたつて年に三四度しか御座いません。それも平常の食物よりさう上等でもありませんの。妾は年に三四度の御客樣や洗濯屋などの費用を省いたら何程經費を減らすことが出來るかなどゝは思ひませんよ。電燈の代りにランプを使つて見ましたが、それで儉約になりませんし蠟燭では讀み書きが出來ず、食物は非常に單純ですけれど、私共の食べるのは單純でも質がよくないと不可ないと思ひますの。或時は食物を減らして見ましたが躰が弱つて却て損になりますんでした。

良人は月に六十圓、恰度家計の經費だけ儲ります、が、是だけでは衣類も家具も買へず、醫者も頼めず旅行も出來ず、それで一錢の貯金も出來ないんですよ。ですから妾の儲けは此方に廻はるのですよ。え、妾は毎日商店の書記をして居ります。妾は此費用として區別もしないですけれど恰度それだけになりますの。而して妾は三百圓の貯金もしました。

斯うして今日は兎に角間に合ふて居ますが、若し良人が病氣でもしたら何うするんですか、僅か三百圓ばかりでは一月も藥を服むもんなら……妾は心配でなりませんよ。それから老年になつて仕事も出來ずに生てるやうでは困るから養老保險はかけてありますが、素より私共は雇人の身ですから何時解雇されぬとも限りません。妾それを思ふと只心配ですよ。近來も妾の親類などは商館に勤めて可なりの位地を占めて居たらば急に解雇されたんですよ。解雇も良いけれどその仕方が憎らしいぢやありませんか、或月給日に何か書付を與れたから開けて見ると、「……には明日から出勤せんでも……」といつたやうな次第、落膽したけれ共もう詮方がない、先方は雇主此方は被雇人なんですからね。全體雇主なんて勤人の腕や力で腹を肥やして居ながら、それは〳〵冷淡なもんで御座いますね。

別段仕事もなく働くとしても私共などは決して豐かぢやないんですよ。私共も既う四十に近いですが、何うして子供なんか育てるでせう。妾も女に生れて一度は人の母になつて見たいんですが、それが叶はんので生きてる間は必要もないと思ひますよ。丁抹といふ小い國などでは、社會主義が行はれて、婦人は分娩すれば仕事を休まして而かも相當な手當をするやうな法律が出來たり子供の養育教育費なども増してやるださうですが、米國などで此貧乏には夢にも見られませんですものね。折角子供を産んでも自分と同樣、教育もされず金もなく一生苦しむかと思ふと可哀想で、欲しいことには限りありませんけれど、斷然産まないと決めたので御座いますよ。

斯う申しましたら、其麼意氣地のない奴と一緒になつてるより、充分金も儲け子供を育てる人に嫁つたら良いと彼方此方でもあるんでせうが、良人は決して意氣地なしでも惰者でもない、朝から夕まで一生懸命に働くそれは〳〵勉強家なんですよ。何程働いたつて人の力には限りがあり且つ今日のやうな不公平な社會では、私共のやうな賃金奴隸に到底浮ぶ瀬が御座いませんよ。ですから安心して子供も産めないですの、夫婦の目的も達しかねて……。

（完）

社會主義金曜講演

▲毎週金曜日午後六時半神田三崎町三ノ一（東京座より六七軒）吉田屋にて▲毎回、堺、幸徳秋水、山川均等▲講演後は質問、談話等隨意▲社會主義は男女の絶對平等を主張す▲男女共來れ御同意の方

（會費金五錢）

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

追放

小野吉勝

僕は結婚した、結婚したが故に今住み馴れた郷國を追はれて行くのである。名にし負ふ三の鐘が暮打時は僕等に最後の訣別を告げて居るかのやう。

郷國!何だ馬鹿々々しい、知己朋友輩いに何するものぞ。

「氣でも狂つたのか君、あんな「新平民」野郎の娘と嗜付くなんて、物好きにも程があるじやないか」

忠告だ、諫言だ、と默つて聽いて居れば可い氣になつて、言ひたい放題をほざきやがる。

人格を無視するやうな奴等に、何の親友も忠言もあつたものじやない。「新平民」の娘と結婚したのが何故可けない。

僕の信ずる或先輩の言じやないが、父母はあつての故郷である。父母は實に神以上の慈愛の手を垂れて其子を護つて下さる、寔に親子の間には一點の虚僞も隙隔もない筈である。故に懐かしいのである。戀しいのである。

だけれども若し一點、父母か慈愛と思ふ心より、其親權度を過ごして、其子の人格を侮辱するが如きことあつては、最早天より授かつた神聖なる親子の關係は斷絶したものと思はなければならぬ。

僕は今所謂「穢多」階級を妻にしたが爲に父母にすら見放されたのである。父は怒つた、母は泣いた、勘當を豫期した僕は、其身の始めて自由になつたのを神に謝した。僕は之れから生涯萬里漂浪の身となり得るのである。

けれども僕は最早孤獨でない。寂寥でない。僕の左腕は常に暖かき新婦の細腰を擁して居る、天上天下又何のさびしいことがあらうぞ、何の恐しいことがあらうぞ。

固陋なる舊思想に養はれ來りたる父母にとりては、やれ血統か何うの、家系が何うのと、本人の人格はそつち除けにして、先づ第一に之を亂したがるのも敢て無理とはいはぬ。けれども今日は既に時世が違ふ、タイムの流れは常に毎に新らしき方向に進んで居る。幸か不幸か僕はこの流れの先頭に立つの自覺を有して居る。父母と合はないのも尤である。

血統や階級や吾人に於て何の權威があらうぞ、彼も人であれば我れも亦人である、我人情を解すれば彼亦情の子ではないか。

僕の彼女との戀愛は意氣によつて成り立つたのである、彼女に取るべき所は容貌でない、才學でない、所謂美人、所謂秀才の虚名を追ふべく彼女はあまりに小擇である。彼女の唯取るべき所は「信」の一念にありだ。その信念の厚さ、僕は唯敬服の外はない。その信念の堅き光明に浴したる僕は直ちに宇宙の美と合體した。

だから何時の間にか彼女と僕とは、宇宙の一大婚姻塲裡に於て神前に手を握つたのであつた。

蠢爾たる蛆虫共の世評!吾が一嗤にだに値せんやだ。吾等相互に百萬人力の後援を有することを信じ切つて居る僕等にとりては、實に物の數ではない。

さらばよ郷國!僕等二人は最早永久に復と此土地を踏むことなかるべし。僕は今去るべき理由があつて父母を捨て、永久に去るのである。併し、併し今日までの養育の高恩は、昔を掬ねたる不幸の此胸にも涙と堪えて居る。

けれども一片男子の面目、人類の尊嚴を侮辱するに至つては、神聖なる親子の關係は斷絶したと見ざるを得ない。

さらばよ吾が故郷!僕と今肉に生れたる地を去らんとす、願くば肉に纏綿たる吾等が父母を護れ。

船中雜記

黒瀬直養

有名な上海メール、春日の船室は噸立派だらうと思つて居ると大常違ひ。立派なのは一、二等室ばかりで、三等室は内地航路のよりもまだ酷いのだと云ふこと。横濱の棧橋へ來てから、態々此の船を選んだ愚を悟つたが今は仕方がない。

一段々々光線が乏しくなつて、黴温い厭な臭氣の鼻を襲ふ、殆と直立した梯子を下りて、邊を見廻すと驚いた。前に行けば行く程暗くなつて、少も明の差す所がない。それも其の筈、正直なボーイ君の告白に據れば、此處は元來貨物室なのだが、除路不通で乘客の込み合ふため、往航だけ臨時に客室としたのだ相な。

午前十時出帆。切符調があると云ふので、餘儀なく手探りに席を求めて尻を据ゑる。

「オヽ暑い!」

「蒸し殺され相だ」

「アラ御免なさい……私また自分の鞄かと思つて」

「持つてくんなら持つといでなさい、其の代り胴が附着いてますせ」

「オホヽヽヽ」

「アハヽヽヽ」

顏が見ぬので、皆遠慮なしに口を利く。

「何方ですか、惡戯をなさるのは」

怪からぬ奴が居るとみえる。

不用心を感じて燐寸を擦つたのだらふ、急にパツと明るくなる。

「ヤア!」

「お早う」

「君か、さつき僕の頭を蹴つたのは?」

「左樣かも知れない、後で謝罪る」

「謝罪るなら今でも善いじやないか」

「なに、暗なつてからの方が謝罪り善い」

燐寸で思ひ出したやうに、皆煙草を喫ひ付ける。燐寸の消えた後は星のやうだが、星程には明るくない。

「私、三等は初めてなので、苦しくつて仕方が御座いませんわ。何時も二等ばかりなんですもの……今度は二等も一等も皆滿員ですつて」

「オヤ、私も左樣なんですよ。申込み方が遲かつたんで、特三まで塞がつて仕舞ひましたの」

「私も左樣で御座います」

「私も左樣よ」

「私も」

身形の見えぬのを幸に、隅疾い所で虚榮心を滿足させて居る。あゝ女だ。

檢査が濟んで甲板へ上ると、船は今丁度東京灣を出る所だ。觀音崎の砲臺に近く、何の標か大きな浮標が浮んで居る。外面は赤く美しく塗られてあるが、目に見えぬ鐵の鎖に縛せられて、流れもやらず漂ふのだ。其の周に小さな木片が幾つも浮んで居る、人の目には付かぬけれど、風に從へば大海の眞中にも漂ひ出やう。波のまに〳〵漂泊して居る状が如何にも自由で樂し相だ。囚はれたる浮標となつて錦衣を纏はんか、放たれたる木片となつて襤褸を纏はんか、其の惑ひも既に昔となつた。大島の煙が我が心を誘ふやうに長閑に空を流れて居る。

暫し余は錨綱に腰を掛て默想に耽つた。ト、頭上遙に美妙な樂音が響く、珍しくも其れがピヤノである。余は其に近寄つて大扉に歩を運んだ、そして船橋を仰ぎ見た。此娯樂室の入口と覺しき所に一葉の掲示がある「三等船客の出入を禁ず」と。嗚呼、今日の社會に於て娛樂場の入口に立られた此制札は、何時まで團結せる平民の侵入を防ぎ得るであらうか。壯健なる男女は一人々々階下に集つて船の縁に船檣を仰いだ。

余は此の間に例の二十七字詩數首を試作も得たので、妻を人無き船首に誘ひ、促して之に吟せしめた。

○浮た汽船に乘ては居れど我ア何時でも沈み勝ち

○扇子開いて兩手に持て飛で行き度い富士の上

○風が取持遠州灘で男波女波の痴話狂ひ

舳先に砕く濤の音は、トツトンが奏でる琴のやうに、飽くまで高い調べを合せた。余は此の時ばかり恍惚として妻の美音に聽き惚れた事はない。

いつかピヤノも止んだらしい。甲板を洗ふ噴筒の水に袖を濡らして、富士の名殘を惜みながら室に歸つたのは午後三時。もとより日暮れを知る由もない。

長い苦しい夜が明けるのを待ち兼ねて、再び甲板へ上つたのは、朝風涼しき七時過だ、日はもう餘程高く昇つて居る。

余は寒き欄干に肱を乘せて脚下の水を眺めた。千尋の底も透き徹るやう、潮に一點の塵も浮ばぬ。此ういふ潮に身を投げたら、飛び込む刹那に肉も骨も悉く溶けて、清澄無垢の水と化するに違ひない。

突如一眼に射る銀箭一枝。余は愕然として瞳を凝らした。

箭は數町を飛んで彼方の波間に沒したのである。

何物ぞ?と訝る間も無く、今度は余の眼前を横つて、二尺ばかりの研ぎ澄した劍の樣な物がキラリと閃く。

『飛の魚!』

思はず余は叫んだ。

一尾、二尾、三尾、五尾、今や數ふるに暇も無い。

さらば、余は玆に筆を投じて云はう『紀州沖に旭日を浴びて飛ぶ神魚三千を見た』と。

[illegible]い際、特に欄を設けて[illegible]の行を賜はされし、[illegible]見、紫山、中山、[illegible]見諸氏に對し此處に厚く謝意を表す

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

石川三四郎氏より

今日は秋雨蕭々として、肌の寒さに堪えず候、雨だれの桐の葉を打てる軒端に奏つる音を聞き候ては、言ひ難き淋しさを感じ申候、此の雨の日を鬱しく談り暮らせしと今は昔の夢となりしとの思ひ出でられて、スチートの盛衰を少しばかり感じ候△秋水兄一家歸國せんとの由、何卒養生肝上候、同兄の一身は日本社會主義の運命に大關係を有するとなれば、一刻も早く健康回復の上、捲土重來せられんとを祈上候△諸兄中の論爭ドウやら公然分裂の形勢と相成候由小生の意見よりすれば痛ましき事に候、全然主義上の議論に候はゞ、左程憂うるにも足らず候へ共、多くの場合が悪感情を惹起するものに候、寧ろ其の反感が主となるものに候△問題が公然になりては、小生も一言申し度候、小生の意見は從來と異らず、社會主義といふ大理想を實現すべく(何れも議會政策も直接運動も)一個の手段たるべしと存じ候、此の前提によりて各自が自己の好むところに專心せば、少しも互に相防ぐると有之間敷候、寧ろ斯くてこそ、大理想實現のために、大協同の實を舉げ得べきと存じ候△小生の考にては革命の機運來り候際、專ら其効を奏するは、クロ翁の所謂「收用」にありと存候、併して其「收用」は革命に際しての一戰術に過ぎず候、總同盟罷工は、革命運動其物と成るべきも、其時機到來するまでは、仲々容易の事には非ず候、而して其時機までは、議會運動も、自動的事業も皆種々の重要手段たるべく候△何れにしても世界的大革命の機運が早晩來るべきは疑ひ無之に候、吾等の責任が其道備へにあると思へば、隨分心も急がるゝ事に候、吾等は此大運の來迎に努めざる可からずと存じ候、深く地を穿てば、降る雨も深く浸込む道理にて永く忍で蔵く深く傳導せば革命も從て深刻に行はれ得べしと存候△此の問題に關して小生特に憂ひ候は、中央同志間に爭論ありとて失望せしもの多しとの事に候、此の際大に研究心をこそ起すべけれ、決して失望に及ばず候、東洋人の舊き習慣たる「先輩に依頼するの心」は、吾黨には所禁に改度候、先輩と共にする自主心を強く持ち度きものに候△歐洲の社會黨が總て革命的態度を棄て丶改良的になれるは、十數年來の事實に候、此に於てか無政府主義者の氣焔を揭ぐる時機が到來したるものと存候、日本にては、兩者が一團となりて活動する機に致し度存じ候、此の書新聞に掲載すとも小生には不都合なし、社會の樣子を知らねば兄が取捨に任せ度候、此の書西川兄の許に送らんとも思ひしが、或は兄をして迷惑を感せしむるに至るやも知れずと存じ御許にアドレス致し候△此の頃獄中の寒さは烈しく候、被服薄きが故に候、此の有樣にては極寒の時が思ひやられ候△小生今年中は歷史の研究に專一ならんと心組居候、カーカップ、モリス、バックス共著、デロンレーリー、ウエブ、ハワード及びベイタサットー、などの書を主として參照致候、注意すべき點、參考すべき書籍あらば、御申送願上候△深尾君容易ならぬ病氣の由、御氣の毒に候△西川君ファザーインロー御逝去の由、文さん定めし御落膽の事と推し上候△赤羽君少し奮發して呉れ給へ(十月十三日)

西川文子女史より

福田樣相變らず御勤勉の段感服の外ありません、此頃の世界婦人内容いみじく豊かにおもしろく存候

敢て何秋氏のおやさしき小笛日記を眞似てと云ふには候はねど私ども、小供に遺すものとては財産は勿論、地盤も名譽もありませぬし、且そんなものは遺すも徒なしと存じますので、小供が生れてからの日記をつけておいて、成長の後ゆづれば、さぞ喜びもし、何かの爲にもと思ひますので記して居ります、一寸面白いかと存じますから、此頃の一日を御目にかけます

●坊の日記　みつる

九月二十四日　秋季皇靈祭　晴　朝、母さまとお使に淺嘉町にゆく、靴はいて一丁程あんよで、あとは「負ぶして」と云ふ、家々に日の丸の旗が立つてゐてうれしいので、「ヘタ〳〵タント」と大聲で騷いで兩手をたゝくのでみんな不思議相に眺めました

歸つてから「兄ちやんゆく〳〵」云つて母さんにねだる(兄ちやんはお隣の書生、同家の五ツと二ツの子も兄ちやんと云ふ)、兄ちやんは一寸オツカない伯父さんの樣だが抱いて大變可愛がつて呉れますから直さんも尚さんもみんな兄ちやんが一番好きです、今日は學校が休みでよく遊んで下さつた、坊は床の間に上つては「みんな、上んが、、」と手を打ち、飛び下りたり上つたりして遊ぶ、玩具を取ると直さん(五ツの女の子)が「直のちや直の人形取つた」といつて怒ります、尚ちやんはおい〳〵しますから「ワン〳〵」云つて坊も直ちやんも眞似して座敷中はひ廻ります、一時間も遊んで、「母ちやん行く〳〵」云つて、つれて來て貰ふ

おうちに來て「母ちやん乳與れ」(美濃で覺えて來た言葉)云つて乳のみました

「パツポ、トツチンチン〳〵母ちやんパツポ」云つて帽子(父さんの)かぶつて、兩手を上げて飛びました、(これも元祿踊といつて美濃で坊より四ケ月前に生れた從姉から覺えた踊)

又例の床の間の木を座敷一パイ取り散し、「ミンナタント」いつて手を打つて遊びました(これは日曜に父さんと母さんとで大掃除したのを覺えてです)、坊はいたづらしては「父ちやんメー〳〵」と小さな拇指を立てゝ小首かしげて母の顔をのぞき見ます、(或時父さんがメーなさるからと云つて止めたからです)

夕方、近所の子が外で遊んでゐますから、坊も靴はいて一時間も走りました、ママ(ゴム球)持つて走つては「マアマ丶丶丶」と云つて拾つたり捨てたりして

パンプ、アカ〳〵つけてから坊一人先きにオトヽ、シイシでマンマ、ゴ(御飯)すましました、暫く遊んで「母ちやん、トン〳〵(ふとんの事)取つてー(やはり美濃の言葉)」云つて床敷いて貰ふ、又か、ない、か取つてー(かは蚊帳の事)云ひますと母さんは蚊はモーゐませんから蚊帳はいりませんと、いやーか取つてーとねだりましたらとう〳〵母さんがまけて出して下さつた、坊一人で一角の釣手とかやのかんを持つて結ぼうとしても出來ません、床に上んがしてもとゞかず、机の上にと考へても駄目でした、此度はトウ〳〵坊降參して、母さんに釣つて貰ふ

それから坊、トリ(鳥のこと)〳〵といつて蚊帳を持上げては入つたり出たりしてゐます中、やがてお父さんお歸り、お土産のアンコのパン、パン〳〵(半分にすると)してー云つてアンコの處から食べました

夜は父さんの背に「お馬ドン〳〵」したり、「上がした〳〵」と立つちして遊んで、トタ〳〵机の角に打つかつて泣き出しました、それからは母さんにだかれて乳のんでゐる中、寝てしまいましたが、知りません

●母の日記

此頃は坊の一番可愛い時でしやう、五ッ六ッになれば物云ふも歩むも普通のとで、その上憎まれ口も利きましやうが、今日此頃は少し片言の云ひ初め、歩み初めで、道路を歩いてゐる人間の中では一番小さいので、誰にも「まあ可愛らしい」「よくわいよが出來ますね」と眺められ賛められて、その上の得意はないでしやう、大きい人の眞似をしたり、飛んだりはねたり、暫くも起きゐる中は一時も休みません活動して、言葉も單語より熟語の片言、一綴りより二綴の言と進んで云へる樣になります、とこを見ても活々と一寸の隙もなく活躍してゐます、モー死ねばかりの腐敗然たる老人に比して奈何の差でしやう、大人にも常にての希望、活動、向上の氣さへ腦內に充満してゐれば決して錆がれはしますまい

編輯日記

十月二十六日　星五ツ、曉月、寒、冷たき大空の底に沈みて薄き空色の雲いと面白う綴りたり、明けの風情の梢をサラ〳〵と渡る、井戸の水に憂愁湧けり、はかなき聲にピツピーと現か夢の調の哀れを傳へて蛇が泣く、風の色もすがれたり、編輯は今日をし切りとなしつ、昨日女史郷里より歸京せられぬ、思へば山河は永遠に在り、云ひ知れぬ別れの情ぞ忍ばるゝ、午後印刷屋へ參りたるに來月三日までは「世界婦人」の印刷に着手すべくもあらず、發送は八日になるべしと云ふ、此の度にたがねず、期日には發送する心なりしを口惜しと思へと止むなきことにこそ

十月二十九日　用ありて社會新聞社に夜半十一時を過ぎしたり、歸るさ杉の並木の闇を出づれば月上れり、黒くそびゆる杜を掠めて淋しき光り渡る、其二つに剃りて血に染めし色、空は凝りたるもの丶如く閉し闇より出で丶闇に消えゆく黒き鳥の、聲も立てぬあやしさ、大銀杏に憎くき戀敵の妻を呪ふ女の、呪ひの言葉を今こゝに聞く思ひするおそろしさ、恨みに燃えて光りにふく、淋しさは堪えられぬ苦しみ、つく息もせわしくて、小さき犬ころのけうさから、自然の景に表れたる、恨みの情想を斯ひ得たるなり

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

時代の要求により生れたるカメリヤは色白くきめを細かに艶を増し肌を滑かならしむる最新最良の洗粉なり年若き方々のみならず老年の肌には殊に効驗著し

定價　十瓶入廿五錢　瓶入十二錢　袋入五錢　小袋三錢

本舖　ライオン歯磨發賣元　東京神田柳原川岸　小林富次郎

全部六冊
每月一冊宛發行

平民科學

科學に平民科學と、貴族科學、若しくば富豪科學との別を立てる譯は無い。然し今の世では、學問は殆ど富豪貴族の獨占となるべき勢である。よしや日本中に數十個の大學が並び立つ事があつても多數の平民は、決して其門にだも入る事を許されぬ。偶々平民の子弟が謂はゆる若學を以て或は何等かの保護に依つて幸ひに高等教育を受けるにしても彼等は其結果として、直ちに上流階級の附屬となり、富豪貴族の擁護者、贊美者を以て自ら任ずる事となる。既に斯の如くなれば彼等の科學には、必ず階級的偏見が混じて居る。科學の眞髓は固より一樣に、平民と貴族と、富豪とに通ずべきであるが、只だ其の實際の應用に至つては、或は故意に、或は不知不識に、枉げて自己階級の利益を計る事となる。例へば進化論の如き社會主義者は當然に之を以て自己の學說の基礎として居るが、紳士閥（富豪貴族階級）の學者にあつては、往々之を以て社會主義を攻擊するの具に供して居る。そこで平民には平民の科學が必要である。平民は如何なる場合にも、自ら考へて獨立の判斷を爲す必要がある。此叢書は、此必要に應せん爲めに平易、通俗、簡明、直截の文字を以て、一般科學の根本智識を說述するに勉めたものである。斯くて全部を六冊とし其部目及び筆者を定むる事左の如し

第一編　人間發生の歷史　十一月中旬既刊　堺利彥述

第二編　植物の精神　山川均述
第三編　男女關係の進化　堺利彥述
第四編　動物界の道德　幸德秋水述
第五編　地球の生滅　志津野又郎述
第六編　萬物同根一族　堺利彥述

定價一部金卅錢六冊前金一圓六十錢

發兌元　東京市麹町區有樂町三丁目一番地　有樂社
電話本局二〇九五
振替口座三六〇

○兒童の宗教

ジエームス、アトキンス著　大谷虞君譯　定價四十錢　郵稅六錢

搖籃の中神の王國あり眞正の宗教的品性は家庭に根ささるべからず是れ本書の主張なり「小兒を我に來らしめよ」と言へる基督の本旨世に閑却せられたること既に久し現世紀に至り小兒は漸く世人注意の中心となれり。本書は近世的兒童研究の精華を集めて之に論據を置けるものにして父母教師牧師等兒童教育の責任に當れる者の一大指針たり

○七日間

美山夫人田中榮兩女史共譯　定價金三十五錢　郵稅金四錢

道に迷ふた人の子がたうとい愛の御力によつて救はる、世にも美しき物語を優しい筆に寫したる此の書は今の家庭の讀物として極めて適當なものではありますまいか迷ふ人も救はれた人も是非一度は御讀みなさいませ、そして此の本の中に深い教と盡きぬ慰めとを御見出しなさるならば譯者兩人は苦心の空しからぬを喜ぶで御座いませう

○國家存立の原則

樞密顧問官男爵金子堅太郎君述　定價十錢　郵稅二錢

本書は先生が青山學院に於ける大演說の筆記なり

○再版　略註新約全書

紙表紙　金三十錢
クロース　金三十五錢
表紙クロース　金四十五錢
總皮　金六十錢
脊皮金緣　金一圓
總皮金緣　金一圓三十錢
折皮金緣
郵稅　金八錢

○英文　俘虜看護誌

定價三圓　郵稅十二錢

著者日本にありし露國一俘虜の妻好評嘖々興味津々一たび之を繙かば感興措く能はず其內容は八月廿六日國民新聞に於て德富蘇峰先生に由り紹介せらる部數限あり品切れにならぬ中大至急御注文あり

原書名 As the hague ordains 3,00

○酒禍の實驗

島田三□君演說　定價一冊金五錢五十冊以上二割引　郵稅三冊迄二錢

先生が實驗せられたる酒害に就きての大演說の筆記也

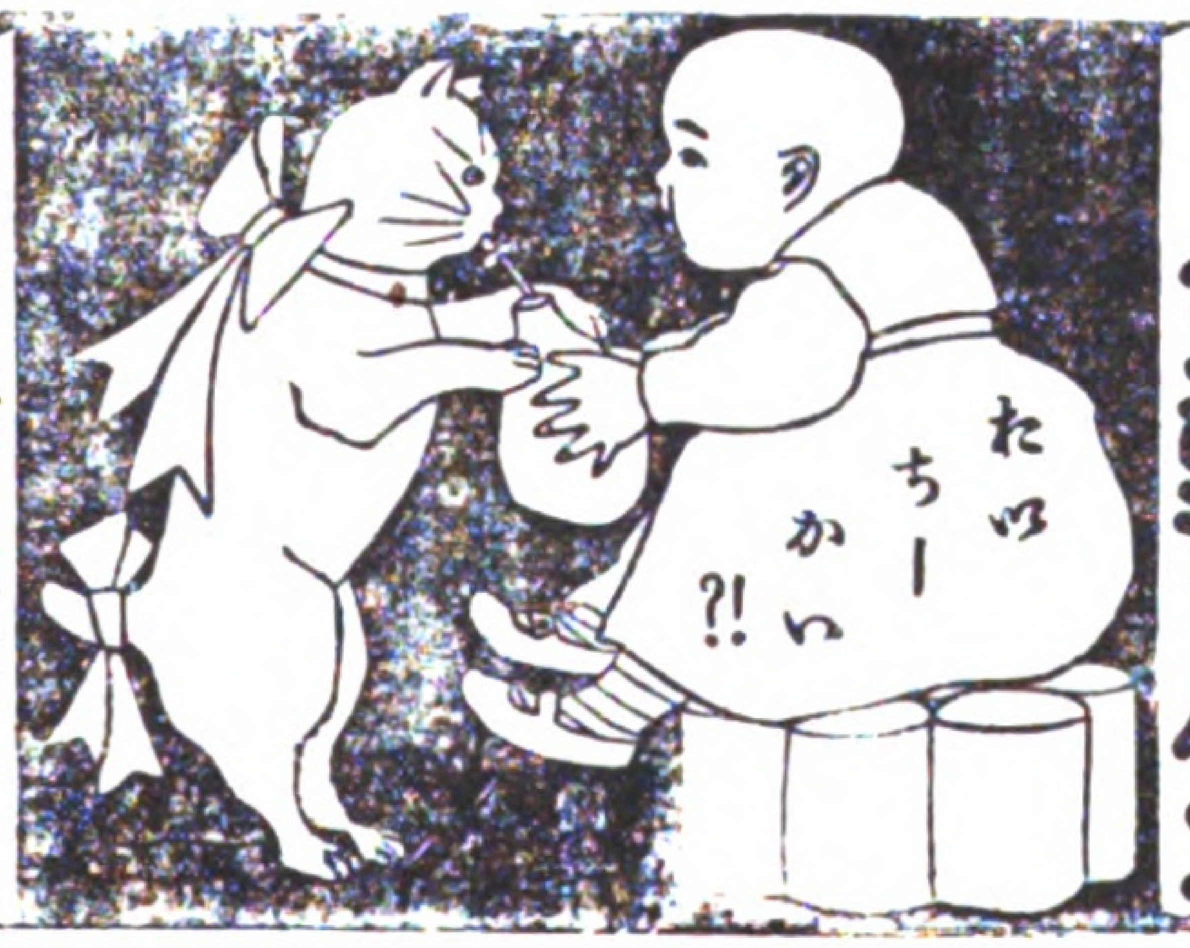
內外書肆　京橋銀座四丁目　教文館　電新二五二六

歯科治療　自午前八時至午後六時

吉瀨歯科醫院
院主　吉瀨才市郎
東京神田須田町二十六番地（萬世橋內右横町）

●藥價手術料共半額
●貧困者施療

伊豆三島　花島煉乳場製
名譽ある
金鷄ミルク



發賣元　東京市日本橋區大傳馬町　逸見山陽堂
（電話浪花二一五一番）
（振替貯金口座三九六番）

明治四十一年用

吾家の歷史

吾家の歷史は一日々に往來、爲したる事、得たる思想、社會の出來事、雜事の諸欄に分ち、詩歌と、格言とを、殊に其日に起りたる歷史上の事實を記載したる、至れりと云ふべし、卷頭に、結婚、誕生、永眠等の家眷と其他の便覽を付したり、趣味參考頗ふる記錄なり。其用意の周到と注意の綿密なる、蓋し稀に見るの日記なり。

定價（折皮九十錢　布四十錢）郵稅六錢

發兌　東京市京橋區尾張町二丁目　警醒社書店
（振替貯金五五三番）

社會主義書籍取次購賣

▲何か女の手に合ふ樣な仕事でもあらばこそ思ふて居ましたが、一向是と云ふ思付もなし、矢張り慣れた事かと思返して此度由分社を再興致しました。どうせ氣のきいた事は出來ませぬが、忠實に働いて見る積で御座います。

▲それで第一の仕事は、地方同志の方々の便利の爲め社會主義書類の取次購賣を致すのです。

▲序に社會主義以外の書物でも、東京に有るものなら總て取次致し升。又新聞雜誌前金搗込の御取次も致し升

▲猶序の事に、古本買入のお世話も致し升社會主義書類を集めるには是非古本を探す必要もあります。

▲そして本社の勉强振りとして、郵送料は總て本社で受持ちます。

▲古本の場合には、本價の外、郵送料と一割の手數料を戴きます。

▲御注文は必ず前金の事とし一口二錢增にして振替貯金に御搗込み下されば別に費用も手數も掛りませぬ

▲又取次の外に、小冊子位は少しづゝ發行致し升。先づ其手初めとして

社會主義大意

附 社會主義書類一覽表　堺利彥著　價金三錢

是を發行致しました。配布用として澤山御注文を願ひます。十部二十錢、廿部三十錢、五十部七十錢、百部圓一册錢。

▲此小冊子を見れば、日本文の社會主義書類が何々あるか一目に分ります。二錢切手御送あれば、一部丈は無代にして差上げます。

由分社
東京淀橋町柏木一〇四
（振替口座一二四一九）

腦病、脊髓病
神經病、精神病　專門治療
土地高燥　電氣治療
閑靜　マッサージ水治

田端停車塲西二丁

東京田端　東京腦病院
電話下谷三三〇一
院長　後藤省吾

◎定價　△一部四錢五厘、十部四十二錢、二十部八十錢
△申込は總て前金の事、△郵稅當方持

發行兼編輯人　神崎順一　東京府豐多摩郡淀橋町角筈七三八番地
印刷人　遠藤友四郎　東京府豐多摩郡淀橋町角筈七三八番地
發行所　世界婦人社　東京府豐多摩郡淀橋町角筈七三八番地
印刷所　博眞堂　東京神田區豐島町卅四番地